

まず **○△×** で回答 ↓ → [次に **○** _____ 個 × 5 = _____ 点 **合計** **△** _____ 個 × 2 = _____ 点 _____ 点] → [最後に やらうと思った項目の [いつやるか] に **○** 印で回答]

Q 設問	○△×	いつやるか
Q1 被災時にペットと共に在宅避難できる、耐震構造の建物やガレージがありますか?		今 1 1 1 週 か 日 間 月 年
Q2 地震で揺れても倒れないように、家具を固定していますか?		今 1 1 1 週 か 日 間 月 年
Q3 自宅や避難所以外での生活訓練となる、ペットを連れての旅行やキャンプ、車中泊をしたことがありますか?		今 1 1 1 週 か 日 間 月 年
Q4 被災時でも使えるように、携帯電話の予備バッテリー等を持っていますか?		今 1 1 1 週 か 日 間 月 年
Q5 ライフライン(水道、ガス、電気)が止まった時の、食事や非常用トイレの備えはありますか?		今 1 1 1 週 か 日 間 月 年
Q6 ライフライン(水道、ガス、電気)が止まった時の、暖房や照明の備えはありますか?		今 1 1 1 週 か 日 間 月 年
Q7 ペットの頭(匹)数分のキャリーケースやクレートを保有しており、その中で落ち着いて休ませることができますか?		今 1 1 1 週 か 日 間 月 年
Q8 住んでいる町ハザードマップを確認していますか?		今 1 1 1 週 か 日 間 月 年
Q9 家族やペットは、割れたガラスや照明が落ちてこない場所で寝ていますか?		今 1 1 1 週 か 日 間 月 年
Q10 飼い主の連絡先のわかる迷子札を装着していますか? また、鑑札やマイクロチップを装着していますか?		今 1 1 1 週 か 日 間 月 年

被災直後の暮らし

被災時の安全と安否

Q 設問	○△×	いつやるか
Q11 適切な場所で排せつさせることができる、もしくはマナーベルト・マナーパンツを準備していますか?		今 1 1 1 週 か 日 間 月 年
Q12 普段出かけない場所や、知らない人や犬がいる場所でも、過剰に興奮したり、吠えたり、怖がったりせず、落ち着いて過ごせますか?		今 1 1 1 週 か 日 間 月 年
Q13 飼い主以外の人でも、首輪やリードの付け外し、エサやりや抱っこができますか?		今 1 1 1 週 か 日 間 月 年
Q14 狂犬病予防接種、ノミダニ予防、混合ワクチン接種などの予防医療、シャンプーやブラッシングによるケアを行っていますか?		今 1 1 1 週 か 日 間 月 年
Q15 居住している町の避難所は、被災時にペットの受け入れができるか知っていますか?		今 1 1 1 週 か 日 間 月 年
Q16 被災時にペットを預かってくれるところはありますか?		今 1 1 1 週 か 日 間 月 年
Q17 被災時の行動や、事前にできる備えについて、家族や親せきと話し合っていますか?		今 1 1 1 週 か 日 間 月 年
Q18 被災時の行動や、事前にできる備えについて、近所の人と話し合っていますか?		今 1 1 1 週 か 日 間 月 年
Q19 自治会(町内会)や子ども会、地域の清掃や運動会など、普段から地域活動に参加していますか?		今 1 1 1 週 か 日 間 月 年
Q20 住んでいる町の防災訓練に参加していますか?		今 1 1 1 週 か 日 間 月 年

公共マナー

コミュニケーション



	Q 設問	解説
被災直後の暮らし	Q1 被災時にペットと共に在宅避難できる、耐震構造の建物やガレージがありますか？	日常生活からの変化が少ない在宅避難が、人もペットもストレスの回避につながります。家屋に限らず、ガレージ等の耐震部分も含めて確認しておきましょう。
	Q2 地震で揺れても倒れないように、家具を固定していますか？	重い家具が転倒して、生活空間が確保できなくなると、在宅での避難が難しくなります。寝室と台所だけでも家具の固定をしておきましょう。家具の下敷きや、建物の倒壊から、安全に逃げることに役立ちます。
	Q3 自宅や避難所以外での生活訓練となる、ペットを連れての旅行やキャンプ、車中泊をしたことがありますか？	ペットと一緒に、避難所を利用しにくいことがわかっています。エコノミークラス症候群を回避する空間づくりや体操法、テント生活でも快適にできる道具の採用など、平常時に備えておきましょう。
	Q4 被災時でも使えるように、携帯電話の予備バッテリーを持っていますか？	災害伝言ダイヤルやスマートフォンアプリなど、通常電話よりつながりやすい通信手段が複数あります。連絡手段の確保は、安否確認から避難生活や被災者支援まで様々な場面で役立ちます。
	Q5 ライフライン(水道、ガス、電気)が止まった時の、食事や非常用トイレの備えはありますか？	米などの保管食材を活かすための水やカセットコンロ、自宅の便座を活用する簡易トイレの備蓄など、在宅避難できるように備えておきましょう。
	Q6 ライフライン(水道、ガス、電気)が止まった時の、暖房や照明の備えはありますか？	電気が止まっても使えるヘッドライトやランタンなどの照明や、暖房器具など、在宅避難できるように備えておきましょう。
	Q7 ペットの頭(匹)数分のキャリーケースやクレートを保有しており、その中で落ち着いて休ませることができますか？	自宅以外でも、生活空間を確保できる可能性が高まります。頭数分のキャリーをどう移動するかも、考えておきましょう。猫に限りますが、安全に移動させる「洗濯ネット」は必需品です。
被災時の安全と安否	Q8 住んでいる町のハザードマップを確かめていますか？	地域の危険を知ることは被災時の判断を助け、普段の備えにもつながります。あなたの自宅や勤務先・学校周辺の「ハザードマップ」を、お住まいの市区町村のホームページで検索してみましょう。
	Q9 家族やペットは、割れたガラスや照明が落ちてこない場所で寝ていますか？	寝る場所の安全には特に気を配りましょう。ペットは、ガラスで足を怪我する危険もありますので、ガラスフィルムによる飛散防止や、防犯ガラスの採用がおすすめです。
	Q10 飼い主の連絡先のわかる迷子札を装着していますか？また、鑑札やマイクロチップを装着していますか？	建物の損壊やパニックで脱走してしまった場合に、見つけやすくなります。電話番号・住所・名前を書いた迷子札を、鑑札等と合わせて装着しておくようにしましょう。迷子札は、首輪がゆるくて抜けては意味を成しませんから、首輪をしっかり装着しましょう。

	Q 設問	解説
公共マナー	Q11 適切な場所で排せつさせることができる、もしくはマナーベルト・マナーパンツを準備していますか？	避難時に、屋内で排せつすることは、周囲の迷惑となります。クレートやキャリーケースの中での排せつや、トイレシートでの排せつも、屋内では避けるようにして、離れた場所で行うようにしましょう。
	Q12 普段出かけない場所や、知らない人や犬がいる場所でも、過剰に興奮したり、吠えたり、怖がりせず、落ち着いて過ごせますか？	知らない場所でも落ち着いて過ごせる事は、ペットのストレスを緩和し、飼い主や周囲の負担を減らします。日頃から知らない場所でも落ち着いていられる様に社会性を身につけるトレーニングを実施しましょう。
	Q13 飼い主以外の人でも、首輪やリードの付け外し、エサやりや抱っこができますか？	自宅以外の場所でフードを食べる事ができ、代わりの人でもお世話ができれば、預け先や避難先の選択肢を増やす事ができます。
	Q14 狂犬病予防接種、ノミダニ予防、混合ワクチン接種などの予防医療、シャンプーやブラッシングによるケアを行っていますか？	狂犬病の予防は法的な飼い主の義務です。また、予防医療は、人にうつる病気の予防にもつながります。予防医療と清潔にしていることは、飼い主以外の人に世話を頼む際の必須条件です。
コミュニケーション	Q15 住んでいる町の避難所は、被災時にペットの受け入れができるか知っていますか？	避難所の敷地内にペットのスペースを確保できるかどうかは、避難所によって異なります。過剰な期待は禁物です。まずは確認してみましょう。
	Q16 被災時にペットを預かってくれるところはありますか？	親せきや友人、事業者など、様々な方法があります。特に大型のペットや危険動物では、いざとなってから預け先を見つけるのは困難です。
	Q17 被災時の行動や、事前にできる備えについて、家族や親せきと話し合っていますか？	連絡を取り合うことは、安否確認や孤立回避に役立ちます。連絡方法の確認以外にも重要なことがありますので、このテストの設問項目を話題にして話し合しましょう。家族に限らず、友人や職場、親せきなどと話し合っておきましょう。
	Q18 被災時の行動や、事前にできる備えについて、近所の人と話し合っていますか？	話し合いは形式的である必要はなく、井戸端会議などの雑談でも意義はありますので、是非「減災教室ペット編」の設問項目を話題にしてみましょう。
	Q19 自治会(町内会)や子ども会、地域の清掃や運動会など、普段から地域活動に参加していますか？	地域活動に参加することは災害から命を守る面からも重要です。お互いに顔の見える関係は被災時の助け合いに役立ちます。同じ地域で暮らす者が顔を合わす機会として、今後は参加してみましょう。
	Q20 住んでいる町の防災訓練に参加していますか？	まずは参加してみましょう。防災訓練でご近所同士が顔を合わせることは、防災課題の共有につながります。地域の役割的な強制参加も、災害に関する課題を共有するきっかけと考え、活かしてみましょう。

